番 組

＜舞囃子＞

淡 路	シテ	金春 飛翔
八 島	シテ	金春 穂高
	笛	赤井 要佑
	小鼓	荒木 建作
	大鼓	辻 芳昭
	太鼓(淡路)	上田 慎也

＜狂 言＞

千 鳥	シテ	善竹 隆司
	アド	小西 玲央
	アド	善竹彌五郎

＜ 能 ＞

山 姥 波濤ノ舞	シテ	髙橋 忍
	ツレ	金春 嘉織
	ワキ	福王 知登
	間	善竹 隆平
	笛	赤井 啓三
	小鼓	荒木 建作
	大鼓	辻 雅之
	太鼓	上田 悟

附祝言

淡 路（あわじ）

当代に仕える大臣一行は玉津島に参詣して帰る際に淡路に渡り神代の古跡を訪ねたところ、老翁と姥が田の水口に幣帛（みてぐら）を立てているので、その理由を尋ねると、イザナギ・イザナミ二神をまつる社の御供田であると答え、わが国土創世のいきさつを語って消えた（中入）。

夜に入ってイザナギの神が本来の姿を見せ、国土の平和な永続を祝福するのだった。

「高砂」等と同じく本脇能物。舞囃子では、後シテの急ノ舞を中心に紋服で舞う。

八 島（やしま）

春の夕暮れ、屋島の浦を訪れた旅僧（ワキ）は浦の老人（シテ）に一夜の宿を借り、この屋島での合戦物語を所望する。老人は景浦と三保谷との鍔引きのことなどを語った後、自分が義経の亡霊であることをほのめかして消え失せる（中入）。

その夜、夢の対面を待つ僧の前に義経の姿の亡霊（後シテ）が現れ、妄執を訴え、弓を流した時の模様を語る。修羅道の苦しみの時が来て、激しい戦闘の様を見せ、夜明けとともにその姿は消える。僧の夢は覚め、浦には潮風が吹いていた。前後場とも充実した重厚な作品である。

『申楽談儀』に「道(通)盛・忠度・よし常(八島)、三番、修羅がかりにはよき能也」とあり、世阿弥作か。

勝ち修羅三番の中のひとつ。舞囃子では、後シテの勇壮な義経の舞を紋服にて力強く舞う。

山 姥 波濤ノ舞（やまんば はとうのまい）

山姥の山廻（やまめぐ）りの曲舞を得意とする遊女「百ま山姥」（ツレ）が、善光寺参詣のため従者（ワキ・ワキツレ）とともに上路越（あげろご）えの道を行くと、急に日が暮れ、一人の女（シテ）が現れて、宿を貸そうと言う。一行を家に案内した女は、遊女に山姥の曲舞を所望し、自分が山姥であると告げて姿を消す（中入）。

夜が更けた頃、降り注ぐ月光のもとで遊女が舞い始めようとすると、山姥（後シテ）が姿を現して遊女に舞を促し、自らも深山の光景や山姥の境涯を謡い舞い、山廻りの様子を見せて、どこへともなく消えていく。

小書「波濤ノ舞」では、本来「立廻り」を舞う部分が、舞の譜となり、橋がかりを使うなど特殊な型の連続となります。通常の演出と謡も異なり緩急もつき、より山姥の凄みを強調した舞台となります。